

茨城大学 iOP ガイドブック

茨城大学の



internship Off-campus Program

はじめに

みなさんが大学に入学したとき、キャンパスライフとして、教室で学び、実験室で分析・観察し、ゼミで議論し、4年生になれば図書館や研究室に籠もり研究レポートを作成する自分の姿を思い浮かべたでしょう。もちろん、サークル活動や新しい仲間との交流にもワクワク感が湧いていたと思います。しかし、茨大はそれだけではありません。“iOP”という学外学修のプログラムがあります。私たちは、学びはキャンパス内で閉じるものではなく、キャンパスの外での実践活動でさらなる学びの深化になると考えています。私たちは、インターンシップ、海外研修、サービス・ラーニング（ボランティア活動）、発展学修などの学外学修において、みなさんの主体的な取組を尊重しています。

“iOP”は2019年度から全学的にスタートした新しい取組ですが、遡れば、70数年前、茨城大学の開学式で、鈴木京平初代学長が訓示で結んだ言葉、“諸君こそ、茨城大学の先頭である、野心満々たれ”にたどり着きます。鈴木初代学長は、1期生だけでなく、その後続く茨大生にも、自主自律で野心を持って先頭を歩む姿を想像したでしょうし、今の私たちも同じ想いです。そのことは、開学時に掲げた教育方針のなかにもはっきりあります。すなわち、「注入他律の教育を排し、（中略）、常に提携して教室内外に於ける学生の自発的自治活動を奨励し、常に学生の個性発見に留意し、学生自らの力によって天賦の能力を啓発するように導くことに努める。」という宣言です。下線部のことに着目すれば、“iOP”は茨大の開学の精神を象徴するものと言えるでしょう。

学外での実践活動のもう一つの楽しみは、“発見”です。仕事、研究、異文化、人との出会いなどの場面で、意識を持てば、必ず何かを発見すると思います。“iOP”がその一助になり、みなさんの学業において、他者に語れるプラスの出来事になることを祈っています。

茨城大学 学長

太田寛行



目 次

はじめに

1. iOP とは	1
2. iOP は正課外を中心とした主体的な活動	1
3. なぜ iOP なのか	1
4. iOP の要件・認定の基準	3
5. iOP の流れ	4
6. iOP 活動の種類	7
7. iOP 活動に当たっての留意事項	8
8. iOP の修了・活動の認定	8
9. iOP に関する相談等窓口	9
10. 各プログラムのねらい, 体験談等	10

1 iOP とは

iOPとは「Internship Off-campus Program」の略で、3年次の第3クォーター（9月下旬～11月）に原則として必修科目を開講せず、大学全体で特に学外における学びを促進する、茨城大学独自の教育制度です（ただし、工学部については、カリキュラムの特性上、3年次第3クォーターにも必修科目を開講しています。工学部学生については、iOPに代わるものとして大学院博士前期課程における「OFF-CLASS-PROJECT」があります）。この期間は夏休みともつながっているため、最長で4か月近くをiOPに使うことができます。

2 iOPは正課外を中心とした主体的な活動

iOPは、主として学外において主体的な活動に取り組むことを目的としており、多くは授業（正課）外の活動となるため、単位は授与されません。ただし、授業化された海外研修やインターンシップなど一部の活動は、授業科目を履修して試験に合格すれば単位も授与されますし、iOPのインターンシップとしても取り扱われます。

一方で、授業化（単位授与）するという事は、授業時間や成績評価など、法令等上の様々な制限の中で実施する必要がありますが、授業外の活動である場合、それらの制限に縛られることなく、各自の興味・関心、目的や活動の進捗等を踏まえ、自由な活動を行えるなどのメリットがあります。

また、単位は授与されませんが、所定の基準を満たせば「認定書」が授与され、茨城大学がその活動を認めるとともに、就職活動などで活用できるよう、学業成績証明書にiOPで取り組んだ活動を表示し、学生が茨城大学での学びをどのような活動に生かしたかを証明します。

3 なぜiOPなのか

ディプロマ・ポリシーを達成する

ディプロマ・ポリシーとは茨城大学を卒業するために身につけることが必要な能力で、卒業基準・学位授与の方針とも言います。これらは各学部や学科等の単位でも定められていますが、全学のディプロマ・ポリシーは

下記のとおりとなっています。

【茨城大学ディプロマ・ポリシー】

茨城大学の教育目標は、変化の激しい 21 世紀において社会の変化に主体的に対応し、自らの将来を切り拓くことができる総合的人間力を育成することである。そのために茨城大学の学生が卒業する時に身に付けているべき能力を、以下に示す 5 つの知識及び能力で構成されるディプロマ・ポリシー（卒業基準）として定める。これら 5 要素の比重は分野毎に異なるが、茨城大学を卒業する学生は、どの分野で学んだとしてもこれらの知識・能力を備えていることが必要である。

- ①（世界の俯瞰的理解）自然環境，国際社会，人間と多様な文化に対する幅広い知識と俯瞰的な理解
- ②（専門分野の学力）専門職業人としての知識・技能及び専門分野における十分な見識
- ③（課題解決能力・コミュニケーション力）グローバル化が進む地域や職域において，多様な人々と協働して課題解決していくための思考力・判断力・表現力，及び実践的英語能力を含むコミュニケーション力
- ④（社会人としての姿勢）社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての意欲と倫理観，主体性
- ⑤（地域活性化志向）茨城をはじめとする地域の活性化に自ら進んで取り組み，貢献する積極性

茨城大学の授業は、すべてディプロマ・ポリシーに掲げる能力を身につけるために開講されます（卒業要件外科目を除く）。そのため、下記のカリキュラム・ポリシーに基づいて教育課程が編成されています。

【茨城大学カリキュラム・ポリシー】

ディプロマ・ポリシーに示す茨城大学の教育目標を実現するためカリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）を以下に示す。

- ①（教育課程の編成）ディプロマ・ポリシーで定めた 5 つの能力を育成するため、共通教育と専門教育からなる 4 年あるいは 6 年一貫の体系的な教育課程を編成する。
- ②（課題解決能力の育成）課題解決力を育み、学生が自らの理想に基づいた将来を切り拓く基礎となる思考力・判断力・表現力を育成するため、共通教育及び専門教育でそれぞれの特徴を生かしたアクティブ・ラーニング科目を充実させる。
- ③（実践的英語能力の養成）グローバル化が進む地域や職域での活動を支える実践的英語能力を共通教育，及び専門分野に即した形で専門

教育において養成する。

- ④ (地域・国際志向と態度を育成する教育の推進) 共通教育及び専門教育のそれぞれにおいて、地域の理解と国際的な視野を育み、異なる地域や分野、文化的背景をもった人達とのコミュニケーション力や協働性を育成する科目を充実させる。
- ⑤ (教育の質の保証) 学修時間の確保と厳格な成績評価によって単位を実質化するとともに、学修成果の可視化を図り丁寧な学修ガイドを行う。教職員と学生の相互協力と点検により不断の教育改善を推進する。

授業を履修し、単位を修得して卒業要件を満たせば、ディプロマ・ポリシーに掲げる「最低限の」能力は身につけることができます。

しかし、キャンパス内における学びだけで、これらの能力が「十分に」備わったと自信を持って言えるでしょうか。特に「課題解決能力・コミュニケーション力」「社会人としての姿勢」「地域活性化志向」などは、学外での学び・経験を通じて身につけることが最も効果的です。その活動を促進するのが iOP であり、学生の皆さんには、世界や現実の中に飛び込んで、価値観の異なる社会体験を通して広い視野と高い志を養い、主体的な学びの動機づけにしたいと思います。

4 iOP の要件・認定の基準

iOP は、

- ①ディプロマ・ポリシー要素に掲げる能力の向上・深化を図る活動であること
- ② 学生の「主体的な」活動であること
- ③ 3年次の夏季休業期間から第3クォーターの間に行われる活動であること（ただし、これらの期間外の活動を認める場合もある）
- ④ 学生自身が企画し、大学が認めた活動、または大学が提供する活動であること

を、要件としています。

さらに、その活動が、一定の基準をクリアした場合、大学がその活動を認定します。認定された場合、「認定証」が交付されるとともに「学業成績証明書」に活動内容が記載されます。

認定を受けるためには、以下の基準を満たす必要があります。

- ①茨城大学が iOP として提供した、または認めた活動であること
- ②事前指導を受けること、または主体的な事前学修が行われること
- ③事前・事後指導を除き、30 時間以上の活動が行われること
- ④事後指導を受けること（成果報告）

上記③の活動日数・時間については、その活動が③の要件を満たさない場合であっても、複数の活動を組み合わせて要件を満たすことも可能です。ただし、その場合は iOP の趣旨に沿った、一貫した活動でなければ認められません。趣旨に沿った活動であるかの判断については、9 ページの相談窓口（教育支援課）に確認してください。

5 iOP の流れ

iOP は、原則として 3 年次の第 3 クォーター（夏季休業を含む）に学外等において活動を行うものです。

3 年次の年間スケジュール

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
前学期						後学期					
前学期 授業期間				学外等における 学修期間 (夏季休業)		後学期 授業期間				学外等における 学修期間 (春季休業)	
第1クォーター 授業期間		第2クォーター 授業期間		i O P		第3クォーター 授業期間		第4クォーター 授業期間			

しかし、単にその活動に参加しただけでは iOP の目的を達成したとは言えません。

iOP は

- ①1, 2 年次までの学びを通じ、自身が身につけたい能力を意識する【目的】

- ②①の能力を身に付けるための計画や事前学修を行う【準備】
- ③実際の活動を行う【実施】
- ④事後学修を行う【振り返り・展開】

といった一連の活動を行うことで完結します。

〔各段階での取組〕

iOP に向けて、1 年次からの各段階における取組内容は以下ようになります。

ただし、これはモデル的な取組であり、iOP の目的・活動内容はさまざまです。担任に相談したり、各活動の説明会や成果報告会などに積極的に参加して、いろいろな可能性を模索してください。

○1 年次

自身が身につけたい力や将来（キャリア）を考えながら、基盤教育科目・専門科目等を履修し、3 年次の iOP 活動をイメージしてください。例えば、先輩たちの学外学修等の取組などを参考にして、自身の強みを伸ばす、弱みを補うなど、さまざまな考え方があられると思います。もちろん、授業以外の活動において考えるきっかけをつかむ場合もありますので、大学の内外において積極的に情報の収集をしてください。

○2 年次

1 年次にイメージした活動内容について、その目的をより具体的にし、目的達成の計画を立てます（例えば語学力の向上・活動資金の工面・活動するフィールドの実地視察など）。

計画に課題があると感じたら、積極的に担任や9ページの相談窓口にご相談してください。大学でも助言や支援ができることがたくさんあります。

もちろん、1 年次段階のイメージや 2 年次に計画した内容が、その後の学びや経験によって変わることもあるでしょう。

これまでなんとなくイメージしていたが、より具体の目標を見つけることができた、計画上の課題に気づいたといったことは、むしろ望ましいことですので、変更は前向きに捉え、3 年次 iOP の活動をエントリーする時点までに、しっかりと計画を固めるようにしてください。

○3年次

いよいよ実際の活動をする3年次です。年間の流れは以下のとおりです。

4月	プログラムの提示 大学が提供するプログラムの詳細を提示します。
5月末	大学提供以外の活動をする場合の企画書提出締切 大学提供プログラム以外に、学生のみなさんが、個人またはグループで活動したい企画があれば、「iOP企画書」を所属学部の学務グループに提出してください。ただし、複数学部学生のグループによる活動の場合は、学務部学務課共通教育グループに提出してください。
6月	「iOP企画書」の適否判断 5月末までに提出された「iOP企画書」の活動が、iOPとして適当かどうかを判断してお知らせします。
6月末	iOPとして行う活動の届出 iOPとして行う活動を所属学部長に届け出ます。届出の方法は、説明会や事前指導を担当する教員がとりまとめるなど様々ですので、掲示などでお知らせします。
6月～8月	事前指導・事前学修 活動に応じた事前指導を受けたり、事前調査などを行ったりします。 実施時期は、一般的なiOPの事前指導・事前学修の時期であり、活動によっては別の時期に行う場合もあります。以下の活動や事後指導も同様です。
8月～11月	<div style="text-align: center;">  </div> <p>原則として、夏季休業～第3クォーターの間に活動を行います。</p> <p>活動が計画どおりに進まず、目標や計画の変更もありうるのですが、授業化していない活動については、それを成績評価するものではありません。Try&Errorの結果、その要因等を確認することはむしろ望ましい取り組みですので、そのような場合であっても気にせず活動を続けてください。</p>
活動終了後	事後指導 活動に応じて、報告書の作成、成果報告会などを実施します。
3月～4月	iOP認定 P.3の認定基準をクリアした場合、iOP認定証が交付されるとともに、学業成績証明書に活動が記載されます。

○4 年次

iOP の活動は原則として 3 年次で終了しますので、4 年次の始めごろには認定証を受けることができます。また学業成績証明書に活動内容が記載されます。

しかし、iOP はディプロマ・ポリシーに掲げる能力を、さらに深めることを目的とした一連の活動ですので、認定で完結することなく、主体的に、卒業研究や卒業後のキャリアに iOP の経験を活かすなど、発展・展開させてください。

6 iOP 活動の種類

iOP として茨城大学が提供する活動は、主として次の表に示すような活動に分類されます。この他、学生の皆さんが企画した活動であっても、iOP の趣旨に沿った活動であれば、iOP として認められます。

カテゴリー	サブカテゴリー	備考
海外研修	留学	数か月の期間で、主に交流協定を締結している大学への留学。その他、個人で探した留学先や休学と合わせての留学なども含まれる場合があります。
	短期海外研修	2～4 週間程度の期間、協定締結大学または協定外の各大学が行う語学研修や現地の異文化理解活動を行うもの。本学授業活動の一環として行うプログラムもあります。
インターンシップ	各学部・全学教育機構 インターンシップ (企業・官公庁等) 教育インターンシップ (学校等) 国際インターンシップ	本学授業活動の一環として行うもの、個人の活動として行うものなどがあります。 期間・活動内容も受入先によって多様な形態をとっています。
サービス・ラーニング	ボランティア活動	大学内での学びを活かし、ボランティア活動等を通じて実践的能力への展開が期待される学びの形態です。教育やスポーツ活動のボランティア、福祉関係ボランティア、地域活動ボランティアなど多様な活動があります。

発展学修	課題解決ゼミなど	学部の学外学修，社会連携センターや本学教員が企画・支援した授業やプログラムの学外学修があります。
	自主研究など	自主研究，学会や自治体，各種団体等で実施しているコンテストやサイエンスインカレ（主催：文部科学省）等への応募があります。
	チュートリアル	教員が提示した課題について，関連する文献を調査，精読して，レポート（又は論文）を作成します。学部の枠を越えて，少人数の学生を対象とします（所属する学部以外の教員の指導を受けることを推奨します）。学生-教員間では，週1回程度の進捗報告を行います。

上記の活動の他，複合した取り組み（海外インターンシップ，海外ボランティア）などもあります。

7 iOP 活動に当たっての留意事項

iOP 活動の内，インターンシップなど学外機関に受入れてもらう活動は，茨城大学学生の学びのために受入先（企業・官公庁・学校等）の協力をいただいて成り立っているという意識を常に持ってください。また，学生の意欲が感じられないようでは，「主体的な学び」を支援してくれる受入側にとっても「学生の面倒を見ただけ」「負担」になってしまいますので，受入側にも意義のあったものと感じていただけるよう，積極的に取り組んでください。

活動に当たっての留意事項等については，各種活動の事前指導を通じて行われます。

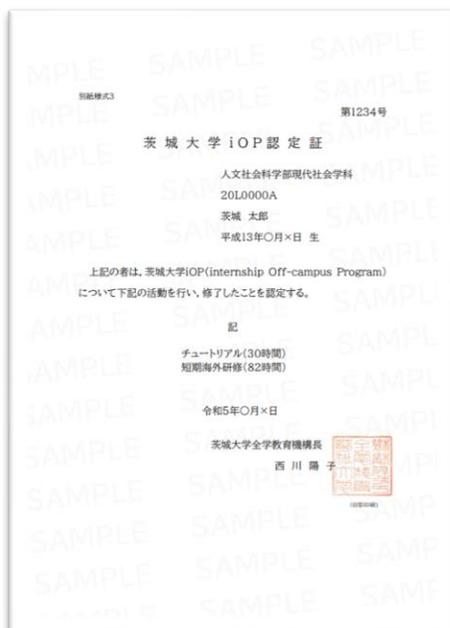
8 iOP の修了・活動の認定

iOP の活動を終了した場合は，大学が活動を認定します。認定された場合，認定証が交付され，さらに学業成績証明書に活動内容が記載されます。

認定は所属学部からの報告に基づいて全学教育機構で認定します。

なお，認定の時期は，3年次第3クォーター（iOP クォーター）で終了した活動については，原則として当該年度末までに認定されます。

認定証



学業成績証明書 表示例

修得 単位数	教養/基盤	専門科目	合計
	28	96	124
【iOP】 課題解決ゼミ等 104日間			
			GPA : 2.97 /4.50

9 iOP に関する相談等窓口

iOP は活動内容に応じて大学における相談等の窓口が異なります。詳しくは活動に関する説明会や事前指導等で説明がありますが、iOP の計画・準備段階においては下記の窓口にご相談してください。

活動内容等		担当課・係等
iOP 全般に関すること		学務部教育支援課 (iop@ml.ibaraki.ac.jp)
海外研修	留学	グローバル教育センター
	短期海外研修	
インターンシップ	各学部で実施するもの	各学部学務係 (グループ)
	キャリアセンターで実施するもの	キャリアセンター
	国際インターンシップ	キャリアセンター
	教育インターンシップ	教育学部または全学教職センター
サービス・ラーニング	ボランティア活動	学生支援センター
	教育支援ボランティア	全学教職センター
発展学修	課題解決ゼミ	各学部学務係 (グループ)
	自主研究	
	チュートリアル	学務部教育支援課

10 各プログラムのねらい，体験談等

iOP は，2017 年以降の入学から全学的に制度化されました。しかし，これまでも学外における学びで貴重な経験をした先輩学生もたくさんいます。以下に活動のねらいや教員からのメッセージ，先輩学生の事例を紹介しますので，参考にしてください。



海外研修

海外研修のねらい

海外研修には受け入れ先大学等で専門的な学習をする留学だけではなく，語学研修，文化交流，地域支援ボランティアなどさまざまなものがあり，その目的や趣旨もさまざまです。それでは同じ内容のプロジェクトを国内で行うのと何が違うのかと問われれば，それは完全にアウエーの中で実施するということになります。私達とは違う文化，言語，考え方，生活様式の中でいかにして自力で生きていくか，自分の考えを伝え，相手を理解し，与えられたプロジェクトを成功させるかといった課題への挑戦です。それを通して得られるものは単なる知識や語学力だけではありません。グローバルな思考や行動力，課題の発見と挑戦，相互理解，公共的な責任感，大局的な判断力といった能力を涵養することが期待されます。

チャレンジする学生へのメッセージ

（グローバル教育センター長：池田 庸子）

私が初めて海外に行ったのは大学2年の夏休みでした。大阪から船で上海に渡り，一か月間一人旅をしました。今思えば，この旅が私の人生の一つの分岐点だったと思います。少しの勇気と好奇心が思わぬ道を開いてくれることがあります。茨城大学では短期研修から協定校留学まで，たくさんの



プログラムを提供しています。好みのプログラムを選んでも、自分で海外旅行・研修を企画してみてもいいでしょう。大学時代だからこそできることがあります。未来の自分のためにも一歩踏み出してみてください。

主なプログラム

交換留学：数か月間にわたって茨城大学と交流協定を締結している大学で学びます。留学先で修得した単位は、本学で修得したものと認定されれば、卒業要件に算入することができます。

短期海外研修：海外の大学又は語学施設等で2～4週間程度の学修や、現地において文化交流等を行います。本学授業の一環として実施されるものと、海外の大学等で実施される語学の授業を履修して与えられた単位を本学で修得した単位としてみなすもの、単位が関係しないものがあります。

これら「留学」と「短期海外研修」について、どのようなプログラムがあるかは、グローバル教育センターに相談してください。

また、上記プログラムの他、学生が個人で留学・研修先を探して活動した場合であっても、iOPの基準を満たせば活動が認定され、さらに修得した単位についても本学で履修したものとみなされる場合があります。

海外研修体験談

細川 凌一さん（教育学部 情報文化課程 平成31年3月卒）

アメリカ・ペンシルバニア州立大学に1年間留学



幼い頃から洋画等の影響でアメリカに興味があり、アメリカの人や文化に直に触れたいという思いからペンシルバニア州立大学の学内選考に申し込みました。それに通り、晴れて渡米が決定しました。しかしリスニングに自信がなかった私は、初め現地の人たちの会話が聞き取れず苦勞しました。そこで毎日2時間以上TEDtalks等

を聞き、リスニング力の向上を図ると徐々に耳は慣れ、後期の正規の授業内では現地の学生と議論できる程に成長し、多国籍なサークル内では一生の友達もできました。非常に有意義な1年弱でしたが、事前にもっと勉強していれば、より充実した1年だったと思うので日本でできることは着実にこなしておくのが賢明かと思います。



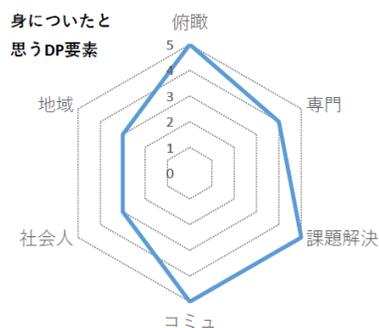
岸本 和樹さん（工学部 都市システム工学科 平成 31 年 3 月卒）
ブルネイ・ダルサラーム大学短期英語語学研修に参加



このプログラムには、英語力の向上を目的に参加しました。

スケジュールとしては、授業が午前1コマ、午後1コマで、授業の後は各々自由な時間を過ごしました。ブルネイの文化に触れたり観光したりするなど、日本ではできない体験ができたのでプログラムに参加して本当に良かったし、様々な考えを持ったメンバーと参加したため、とても刺激的でした。フリータイムも多いため、是非自分自身を見つめなおしたいという学生さんにはお勧めです。

今回短期留学に参加して、様々な視線から物事を考える力と、頑張っって英語を聞こうと努めることで傾聴力がついたのではないかと思います。



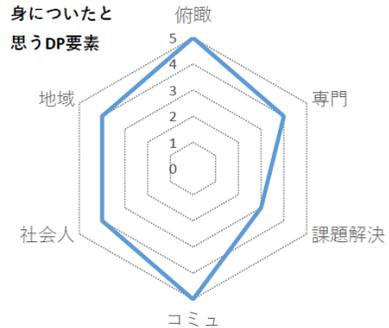
丸山 裕香さん

（人文学部 人文コミュニケーション学科平成 31 年 3 月卒）
イギリス・グロスターシャー・コレッジ短期語学留学プログラムに参加
英語圏で異文化体験をしたいと思い、このプログラムに参加しました。渡航するにあたり、学内の事前授業で英国の歴史や生活文化、危機管理について学びました。研修は17日間で、最初の約2週間はチェルトナムという



町にある学校で語学研修，残りの約 2 日間はロンドンで文化研修をしました。チェルトナム滞在中はホームステイをさせていただき，個人で行く観光旅行では味わうことのできない，英国の生活スタイルを体験することがで

きました。初めての海外で不安だったのですが，大学の先生が引率してくださったので安心して研修に参加することができました。今回の研修は，異文化理解を深めることはもちろんですが，日本を世界の視点から見つめ直す良い機会となりました。



インターンシップ

インターンシップのねらい

インターンシップとは，企業等での就業体験のことです。短期的なものや中長期的なものなどさまざまな形があります。実際の仕事の体験を通して社会人とコミュニケーションをし，社会に出るための準備ができる貴重な機会です。

「自分は何がやりたいのか」考えてみてください。企業リサーチを（今！）行うことで職業観を培ってください。業界研究をしたり，直接企業に電話をしてみたり，先輩の話を聞いてみたり，事前・事後学習や振り返りも含めてきっと多くの楽しい体験が待っています。

チャレンジする学生へのメッセージ（キャリアセンター：小磯 重隆）

学生の皆さんが在学中に自らの専攻，将来のキャリアに関連した「就業体験」をすることをお勧めします。インターンシップを利用して，企業の業務に直接触れてみてください。次のようなメリットがあります。

- ・ 就職活動本番の流れを先に体験できる
- ・ 参加した企業や業界について深く理解できる
- ・ 社会人として必要な基礎がわかる
- ・ 自己理解ができ、自分自身を成長させられる
- ・ 参加企業に就職希望であれば有利になる可能性が高い



また他にも、

- ・ 大学で学ぶべきことが見えてくる
- ・ 自分の適性やキャリアビジョンを考える参考になる
- ・ 参加学生との人脈（人のつながり）ができる
- ・ 実際にキャリアやスキルが身に付けられる など等

しっかりとした「目的意識」を持つことが大切です。任された仕事ではなく、この体験から「必ず何かを得るんだ！」という強い意識が重要です。

主なプログラム

就業体験ができる色々なタイプのインターンシップがあります。

- ・ 実際に業務に従事するもの
- ・ 課題の解決等を体験するもの
- ・ 補助的な業務の一部を経験するもの
- ・ その企業の課題解決に取り組むワークショップやプロジェクトの体験

一般企業のほか、公務系の自治体や省庁、学校、NPO等で実施します。教育課程として単位認定を行うものと、単位のない自由参加があります。有償のインターンシップもあります。いずれの場合も要件を満たせば、iOPとして認定されます。

インターンシップ体験談

紺野 実来さん（教育学部国語選修 平成31年3月卒）

教育学部 iOP「教育インターンシップ（水戸市立常磐小学校）」

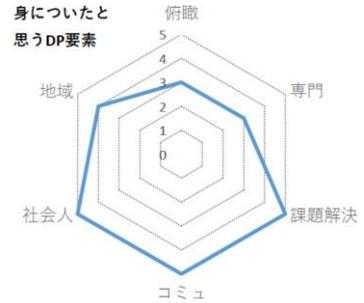
活動の動機は、教育学部生としてできる限りの経験をしたいという思いからです。学生に寄り添い、日程調整を行ってくださるので、準備・活動共に無理なくできました。教育実習で学んだことを踏まえて、子どもとのコ



コミュニケーションや授業中の支援ができ、教育実習での学びをより自分の中に落とし込むことができます。この活動ならではの良さは、教育実習よりも主体的判断力が大いに試されることです。それが困難でもありますが、実践的な学びに繋がってお

り、教育実習と合わせて経験しておくべきです。

人として大切な気配りが学べ、多くの気づきがあり、教職を目指す人はもちろん、そうでない人にもぜひ経験して頂けたらと思います。



中島 まどか さん

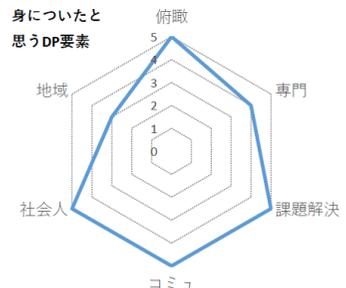
(人文学部 人文コミュニケーション学科 平成 31 年 3 月卒)

インターンシップ先：「株式会社ジェイ・スポーツ」



私は JSPORTS で一週間インターンシップに参加しました。JSPORTS は国内最大 4 チャンネルを持つスポーツ専門チャンネルです。将来、スポーツとメディアが関わる現場で働きたいと考えているため、このインターンシップに参加しました。このインターンシップでは、様々な部署の話聞くだけではなく、実践的に CM を作りナレーション

を撮ったり、プレゼンテーションを行ったりと活動できました。また、同じ業界を目指す他大学の同級生と交流ができたのもとても良い経験でした。ぜひ、インターンシップを通して自分のやりたいことや足りないことをはっきりしてもらえたらと思います。



青柳 利久未さん（理学部 理学科学際理学コース 平成 31 年 3 月卒）
 インターンシップ先：「(野外活動革新事業)ストームフィールドガイド」



私は 2017 年 8 月中旬～9 月末までストームフィールドガイドのインターンシップに参加させていただきました。そこでは、那珂川を拠点に、カヌーなどを用いた川下りのレジャーなどをやっています。私はそこで、実際にインストラクターの補佐として働かせていた

いただきました。カヌーはやったことがなく、普段からもアウトドアに行くようなことはありませんでした。しかし、普段関わりのないところに身を投じることで、自分の成長につながるのではないかと思います。実際に働いてみて、お客さんにどうしたら話を聞いてもらえるのか、どのように言えば楽しんでもらえるのか、また、命を預かる職でもあるので、責任の重さなども考えさせられるものとなりました。ここでの経験は他ではなかなか味わえないものだと思うので思いきって参加してみて本当によかったと思っています。



大村 みるほさん（教育学部 情報文化課程 令和 2 年 3 月卒）

インターンシップ先：「ひたちなか市役所観光振興課」



私は 2 年生の夏休みに地元であるひたちなか市の市役所観光振興課で、10 日間のインターンシップを行いました。観光や広報に関する仕事に興味があったことと、市役所での仕事を実際に体験したいと思ったことがきっかけです。インターン期間中、観光振興の基本である情報発信や、企画立案、イベント

の運営補助を行わせていただきました。活動を通して、どうしたら市の観光資源を多くの人に知ってもらえるか、興味を持ってもらえるか、ということを考えることができました。実際に情報発信のための記事を作成した

り、企画立案をすることは、とてもやりがいがあったし「人に思いを伝える」という点でも勉強になりました。

インターンシップは就職を考えるにあたって良い経験にもなるし、人としても成長できる場だと思うので、今後も機会を生かしていきたいなと思いました。



サービス・ラーニング

サービス・ラーニングのねらい

サービス・ラーニングは「教室でのアカデミックな学習と地域社会での実践的課題への貢献を結びつけた経験学習の一形態である教授・学習法」と定義されています。

教室で学んだことを活かして、地域社会が抱えるさまざまな課題に向き合い、ボランティア活動などを通じて解決に取り組むのが主なプログラムです。活動内容は専門分野の知識・技能を活用するものだけでなく、基盤教育やプログラム科目、資格取得のための学びなどを活かせるものもあります。

活動を通じて、大学での学修内容の理解を深めるとともに、市民的責任が育まれ、社会参加の促進につながることを期待されます。

チャレンジする学生へのメッセージ

(全学教育機構長：西川 陽子)

日本は非常に便利で社会制度も充実しているほうではありますが、万人にとって十分とは未だ言えず、それらの不足の一部はボランティアにより支えられています。東日本大震災では多くの人々が見返りなくボランティアとして活動し、復興の大きな力となりました。



た。ボランティアをされた方々は、単に自分が人の助けになればとの一心で活動されましたが、終わられると皆さん多くの得るものがあったと言われます。自分が生きていることの意義、一生を安心して心豊かに生き抜くために互いに手を差し伸べることの重要性、それらは人との直接のやり取りからしか学ぶことはできず、それらに気づくことができた貴重さから出る言葉です。ボランティアを通じて、普段の自身の生活では出会うことのあまりない人や環境に身を置き、自らの視点を変える体験を是非して欲しいと思います。

主なプログラム

ボランティア活動は、継続的に行われるもの、一定期間で完結するものなど多様な活動があります。どのようなプログラムが用意されるかについては、9ページの相談窓口や、掲示及び各種ガイダンスで情報提供します。

サービス・ラーニング体験談

木下 絵美梨さん

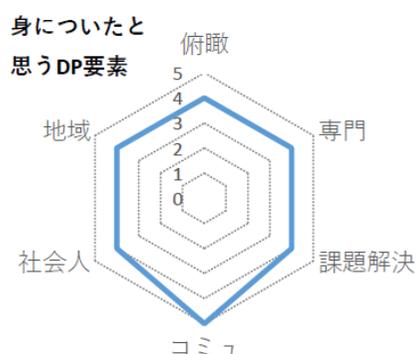
(人文学部人文コミュニケーション学科 平成30年3月卒)

学生地域参画プロジェクト「まなびの輪」による大洗町での活動



大学2年生から3年生まで、大洗町において多文化共生のまちづくり推進を目的にボランティア活動を行っていました。具体的には、小中学校における取り出し授業の日本語サポーター、町役場やボランティアの方々との協働で在住外国人を対象とした日本語教室の運営、イベントの開催を

行いました。活動をする中で、「外国人」と「日本人」に限らず、様々な出身や職業、年齢の方に会ったり、インドネシア出身の方々によるパーティーに招いていただいたりしたことで沢山の異文化に触れました。新たな発見をしたり、改めて「異文化とは、多文化とは何だろう」と考えたりする機会がありまし



た。小中学校の先生方や子どもたち，日本語教室の参加者の方々，ここには書ききれない程多くの方との交流を通じ，成長できたと感じています。

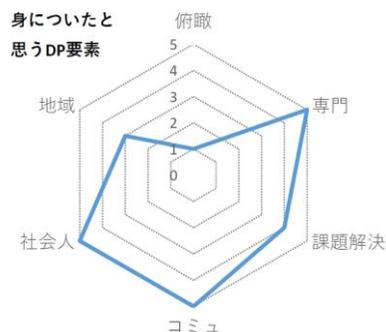
江口 奈和さん（教育学部養護教諭養成課程 平成 31 年 3 月卒）
教育支援ボランティア（常磐大学高校）



3年次の小・中学校の養護実習前に保健室と養護教諭の役割を理解し，日々の活動内容を把握することにより実習における学びを深めるため，母校での参観を依頼し，ボランティア活動に参加しました。

養護教諭になるための大学における学びは新しいことばかりで，何がどのように実際の現場で活かされるのかを知ることは自分の知識を整理するために重要です。このことは他の選修の学生にも共通することだと思います。2年次の後学期に履修する「養護活動演習Ⅰ」を基に保健室経営や養護教諭の職務について理解し，学校現場で健康診断の補助やクラスマッチでの救護補助などを行いながら養護教諭や生徒等の日常を観察することで，保健室と養護教諭の機能・役割がみえ，現場の課題理解にもつながり大学での学びに繋げることができました。

また私はこれらの活動を通じて，救急処置の知識・技術の不足を痛感しました。そこで日本赤十字社における救急法の講習を受講し，正しい知識・技術の習得に努めました。その他，メンタルヘルスに関する集中を受講し現代の健康課題の理解を深めました。





発展学修

発展学修のねらい

「発展学修」は、学生の皆さんがそれぞれのテーマを持って自主的に取り組むものです。「自分の住んでいる市町村の職員の方と一緒に、地域の課題について調査し、その解決のための提案を行う」、「企業の方から学生の皆さんと一緒に取り組みたい商品開発のテーマをいただき、プランニングして提案し商品化につなげる」なども「発展学修」のひとつです。こういった地域・学外からのご要望に学生の多くの皆さんが呼応していただけよう、社会連携センターなどがサポートしていきます。また、ゼミの学習の発展としての地域での研究、ビジネスプランコンテスト、映像コンクールなど各種のコンテストなどへの応募なども含め、自由なテーマ設定が可能です。必要な指導、助言、サポートを行いますので、ぜひ、新しい分野にも挑戦してください。

チャレンジする学生へのメッセージ

(社会連携センター長：中村 麻子)

茨城大学生として、大学のキャンパス内で専門性を高める学修も大事ですが、それらの知識が生かされるためには、地域や社会といった現場での学修も大変重要だと考えています。

本学のディプロマ・ポリシーにも掲げられている“地域活性化志向”は、学生の皆さんが大学で学んだことを活用して、積極的に地域の様々な player と接点を持ち、そこで気づいた地域課題を「じぶんごと」として考えて取り組む姿勢から生まれるのではないのでしょうか。

今の世の中、「取捨選択」をしなくてはいけない場面が多くなっていますが、それができるのは取ったり、捨てたりというアクションを起こした



人間です。何もしなければ選択することもできません。社会連携センターが支援するプロスポーツチームとの連携活動など、学内には様々な地域連携活動のチャンスがあります。是非、iOP というチャンスを活かし、より深い学びにつなげてください。

主なプログラム

発展学修は、社会連携センターや各学部で企画される活動が中心になります。どのようなプログラムが用意されるかについては、9ページの相談窓口や、掲示及び各種ガイダンスで情報提供します。

発展学修体験談

川田 綾香さん（人文学部社会科学科 令和2年3月卒）

「廃校那珂湊二高を活用した多世代交流プロジェクト」

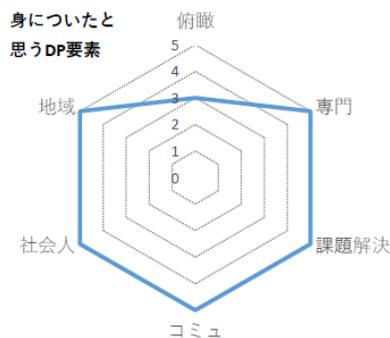


私は、2017年6月に行われたひたちなか市役所主催の「廃校活用学生会議」終了後、学生が継続的に那珂湊二高の利活用に携わっていただけるような仕組みを作るため、参加した学生数名で茨城大学公式サークル「廃校那珂湊二高を活用した多世代交流プロジェクト」を立ち上げました。

これまで、茨城大学やひたちなか市役所、那珂湊地域の方々にご協力

いただきながら、多世代交流イベント「おいもカフェ」や「廃校に関する講演会」を学生主催で開催しました。

2018年10月には、学生考案の宿泊施設「グランピング」も企画しています。廃校が人々をつなぎ、多世代交流の場となるよう、これからも様々なイベント等を企画・運営していきたいと考えています。



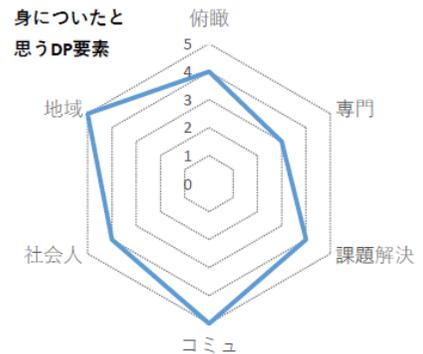
梅津 尊子さん（教育学部養護教諭養成課程 令和2年3月卒）
日本一つながる学食プロジェクト(つな食)



「日本一つながる学食プロジェクト(つな食)」は、茨苑会館内にある学生食堂のリニューアル計画をきっかけに発足しました。学食を様々な人や情報が集まって繋がる場にし、学食を利用する人が自主的に地域に参画できるようにすることを目標としています。活動

の内容は、新メニューの開発、他団体と協力したイベントの開催、地域や企業との商品開発などです。

つな食の活動により、様々な団体の思いを一つの形にすることや、自団体を宣伝すること、大人の方々との接し方などを学ぶことができました。今後の学生生活だけではなく、卒業後も役立つことを得ることができました。大学生のうちしかできない活動ができ、貴重な経験となっています。



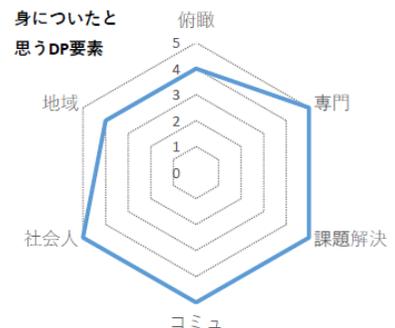
江津 亮太さん（教育学部社会選修 平成31年3月卒）
教育学部 iOP「教員としての実践力をつけるための活動」



教育学部社会選修で5日間にわたって行われた「教員としての実践力をつけるための活動」に参加しました。内容は阿見町にある予科練平和記念館における「社会科見学」を通して、具体的な指導案や児童生徒を連れて見学をする際に注意する点などを考えるというものでした。大学内の授業とは違う視点で取り組むことで多くの気づきがあり、社会科に関する

指導法と関連付けながら教師として必要な資質・能力を向上させることができるのがこの活動の良いところです。具体的には、その場所を何の目的で選び、児童生徒に何を学ばせるのかを実際に考えられることは貴重な経験になりました。

今後の課題としては、自分たちが考えるだけではなく、実際の小学校や中学校と協力をして、見学しているところを見学するなど、幅広く活動ができればいいと思います。



茨城大学 iOP ガイドブック

発行年月日 令和5年2月1日
発行 茨城大学全学教育機構